

「姿」について 柳宣宏

小林秀雄は「西行」の中で、歌を引いて、次のように言う。

心なき身にもあはれは知られけり鳴立澤の秋の夕ぐれ
この有名な歌は、当時から評判だったらしく、俊成は「鳴立澤のといへる心、幽玄にすがた及びがたく」という判詞を遺している。歌のすがたというものに就いて思案を重ねた俊成の眼には、下二句の姿が鮮やかに映ったのは当然であらうが、どういう人間のどういう発想からこういう歌が生まれたかに注意すれば、この自ら鼓動している様な歌の心臓の在りかは、上三句にあるのが感じられるのであり、其処に作者の心の疼きが隠れている、という風に歌が見えて来るだろう。

「心なき」という言葉の解釈を巡って議論もあるようだが、道元禪師の歌などにも用いられており、出家者がこう言う時には、分別心がない、我が無い、といった意味である。あれが美しい、これが醜いといったとらわれのない身にも、あはれは感じられるというのである。鳴という鳥は黒っぽくて、本来夕暮れ時には映えないのだが、輝く落暉を背景に置けば、金屏風を背にした如く実に鮮やかに姿が浮かぶ。ここから芭蕉の「枯枝に鳥の止まりけり秋の暮」は、指呼の間にある。だから、鳴が飛び立つ音に感を発したというのは、肯えない。俊成が「幽玄にすがた及びがたく」と判じた姿は、このよう

な自我意識のない心から生まれたのである。

西行の歌にこだわったのは、「美を求める心」（三省堂『高等学校国語総合 現代文編』採録）を読み解くのに、「姿」という言葉が鍵だと思っただけである。絵画や音楽を例にとつて、美は言葉や知識ではない、というのは納得しやすい。けれども、詩や歌が美しいのは言葉の意味ではなく姿なのだと言われて躓くのは、やむを得まい。赤人の歌が美しく感じられるのは、富士を見た時の赤人の感動が人の心を打つからだ。ただ、感動自体は叫びとなって現れたりするものの、すぐ消えてしまう不安定なもの。そんな不安定な感動を、言葉によって安定した姿にしたものが歌だと、小林は言う。いったい小林が「姿」という言葉を用いて、排除しなかったことは何だったのだろう。言葉の機能の一つである、意味の伝達によって美を表現できないということは、自身が語っている。だが、それだけか。歌という言葉の組織体が美しい「姿」になるのに欠かせないことは何だろう。言葉の意味は、人間の恣意的な分節化による。言葉を発するということは、自ずからあれとこれと、自と他とを分節化することに他ならない。しかし、美しい姿を前にした人間は、自もなく他もなく心を打たれる。そのような力を美は秘めている。つまり、自分の内に発した不安定な感動は、自分自身を消し去ってゆく過程のうちに、やがて自己を超えた感動の共同性へと至るのである。他者と競争に馴らされた現代人にとって、自分を消し去る行為は戦場から後退するようなものかもしれない。だから、美を求める心は育てようとしなければ衰弱するという小林の指摘は、蓋し名言だと思っ。 (やなぎのぶひろ・湘南白百合学園中学・高等学校)